

齊・晏子伝

広辞苑

晏嬰、春秋時代、齊の大夫。字は仲（俗に平仲）。靈公・莊公・景公に仕え、晉の叔向、鄭の子産らと並んで賢人宰相とされる。晏子（～前 500 年）

春秋左氏伝

襄公十七年（前 556）晏子の父、晏桓子（晏弱）死す

齊の晏桓子、卒す。晏嬰、あら布で作った胸掛けや縁縫い^{へり}をしない喪服をつけ、麻の首巻と帯をまとい、竹の杖をつき、菅の草履をはき、粥をたべ、さしかけの小屋に住み、草むしろの上に寝、草を枕として喪に服した。其の老（家臣の老人）曰く、大夫の礼に非ざるなり（士の礼なり）と。（晏子）曰く、（私は卿ではない、）唯だ卿のみ、大夫を為す、と。

襄公十八年（前 555）冬十月、諸侯齊を伐つ 靈公衆を恐れ逃げ帰る

襄公十六年の会盟を暖め直し、諸侯が齊を伐った。齊公（靈公）これを平陰に禦ぎ、防門に塹壕を作ってこれを守る。その広さ幅一里。夙沙衛曰く、戦うこと能はずんば、險を守るにしくはなし（もっと險要の地に拠る方がいい）と。聴かず。諸侯の士、防門を攻めた。齊人多く死す。范宣子が析文子に友人として魯・莒軍が皆車千乗を以て攻めてきているので必ず国を失うことになるから考え直せ、と忠告した。これを齊公に報告すると、靈公は恐れた。晏嬰之を聞きて曰く、「君固より勇無し。而るに又是を聞く。久しきこと能はず」と。靈公山に登って、晉軍を遠望した。齊公之を（陣勢を）見て其の衆を畏れ、すなわち脱れて帰る。齊軍は遁走した。

襄公十九年（前 554）靈公卒し、莊公立つ

靈公は、魯から迎えた夫人に子がなかったので姪に生ませた子が光である。宋から迎えた仲子・戎子の内、寵愛されたのは戎子でその子が牙。始め光を太子としたが、戎子の依頼を受けて、夙沙衛等を補佐につけて牙を太子にした。靈公が病気になるや、崔杼は再び光を擁立。靈公が卒すに及び戎子を弑し、即位した。莊公牙側の夙沙衛や高厚は殺害された。

襄公二十一年（前552）晋の范宣子が、娘の嫁ぎ先欒氏との子・欒盈を追放し諸侯と商任の会盟をした。欒盈は楚に逃げた。

襄公二十二年（前551）欒盈楚より齊に適く。

欒盈、楚より齊に適く。晏平仲、莊公に言ひて曰く、「商任の会に、命を晋に受けたり。今欒氏を納る。將にいづくに之を用いんとする。小（国）の大（国）に事ふる所以は、信なり。信を失はば立たず。君それこれを図れ」と。聴かず。

退きて陳文子に告げて曰く、「人に君たらば信を執り、人に臣たらば共（恭）を執る。忠信篤敬は、上下之を同じくす。天の道なり。君自ら棄てたり。久しきこと能はじ」と。

襄公二十三年（前550）齊公（靈公）晋の内乱（欒氏の乱）に乘じ、衛を伐つ。

晏平仲曰く、「君勇力を恃みて以て盟主（たる晋）を伐つ。もし済（な）らずんば、国の福なり。不徳にして功あらば、憂い必ず君に及ばん」と。

崔杼も諫めて曰く、「不可なり。臣之を聞く、小国、大国の敗をうかがいて、これを毀（こぼ）たば、必ずその咎を受く、と。君其れ之を図れ」と。聴かず。

襄公二十三年（前550）欒盈、晋人に曲沃で殺戮される。欒一族滅ぼされる。

襄公二十三年。魯の臧武仲が、齊に亡命して来た。「鼠の話」

齊公（莊公）將に臧武仲に田を為（与）へんとす。臧武仲之を聞き、齊公に見え、之と晋を伐ちしを言う。對へて曰く、「（戦果が）多なるは則ち多なり。そもそも君は鼠に似たり。それ鼠は、昼伏し夜動き、宗廟に穴せざるは、人を畏るる故なり。今、君は晋の乱を聞きて後に（兵を）作（おこ）るも、寧くば將に之に事へんとす。鼠に非ずして如何」と。すなわち田を与えず。仲尼曰く、「知の難きや。臧武仲の知ありて、魯国に容れざりしは、そもそも由あるなり。作すこと順ならずして、施すこと怨ならざればなるかな」と。

襄公二十五年（前548）齊の崔杼其の君（光＝莊公）を弑す。

齊の棠公の妻（棠姜）は東郭偃の姉なり。東郭偃は崔杼の臣たり。棠公死し、偃、崔杼に御して以て弔う。棠姜を見て、之を美とし、偃をして之を取（めと）らしめんとす。偃曰く、男女は姓を辨（分か）つ。今、君は丁（齊の丁公）より出で、臣は桓（公）より出ず。（同じ姜姓ゆえ婚姻は）不可なり、と。・・・そこで崔杼は筮を立てた。困 大過に往く、が出た。「石に困しみ、蒺藜（いばら）に拠る。その宮に入りて、その妻を見ず。凶」（困の三交）ところが、崔杼は「あれはやもめだ、問題ない。先夫がその凶兆に当たって死んだのだ」と言って妻に迎えた。

(ところで) 莊公(棠姜と)通じ、しばしば崔氏にゆく。崔氏の冠を以て人に賜う。侍者曰く、「不可なり(いけません)」と。公曰く、「崔子たらざるも、(誰だって)其れ冠無かからんや」と。崔杼之を恨みに思い機会を狙った。たまたま莊公がかつて鞭で打ち、後にまた側近に用いた侍人の賈拳がその機会を提供した。莒が齊に和議を申し入れるための朝見での饗宴が開かれたおり、崔杼は病気を口実に欠席した。翌日、莊公が崔杼邸に見舞った。次いで、棠姜を問い、そこで待ち伏せしていた賈拳の兵により、「主人只今病につき、公命に従えない。吾らは淫者を召し取るのが任務。その他の指示は存ぜぬ」との口実で、垣根を超えんとして逃げる莊公をは弓で股を射られ弑された。

晏子は、崔杼の門外に立っていたが、莊公の死を知って、その門が開くと、中に入り、尸(莊公の亡骸)を股(もも)に枕せしめて之を哭し、興(立)ちて三踊(三度おどりあがる礼を)して出づ。人、崔氏に謂ふ、必ず之を殺せ、と。崔氏曰く、「民の望なり。これを舍きて民を得ん」と。

襄公二十七年(前546) 齊の大夫・慶封、不遜なり

(晉の)胥梁帯が、烏餘に土地を奪われた、齊・魯・宋・衛の諸侯に命じ、土地を受け取るように軍備を整え召集した。その際、齊公(景公)は慶封を使節として派遣された。その車美なり。(魯の)孟孫、叔孫に謂いて曰く、「慶季(慶封)の車、亦美ならずや」と。孫曰く、「豹之を聞く、『服の美(分相應に)稱(かな)はざれば、必ず悪を以て終わる』と。車を美にして何をか為さん」と。叔孫、慶封と食す。不敬なり。為に相鼠を賦す。亦(慶封はその意味を)知らざるなり。

「詩経・鄘風・相鼠」:第一章に、「鼠を相(み)るに皮あり。人にして儀なし。人にして儀無くば、死せずして何をか為さん」とある。礼なき者は鼠にも劣るの寓意。

襄公二十七年(前546) 崔杼弑され、慶封が国政を握る

崔杼 前妻の子 成と彊

後妻(棠姜)の子 明 棠姜の弟・棠郭偃と棠無咎が後ろ盾となり、後継指名さる。

前夫の子 = 棠無咎

成に悪疾があって、崔に隠居願いを出したら、棠郭偃と棠無咎が崔は宗廟のある重要邑故、宗主の明が統治すべき所といって反対したので、成と彊は怒り、慶封に相談した。慶封は廬蒲蔽と図って(参照) 崔杼一族を滅ぼした。棠姜は縊死し、崔杼も縊死した。慶封が国政を握ることになった。(景公)

襄公二七年（前546）崔杼を弑するに当たっての廬蒲蔽の慶封への助言

成と彊は怒り、慶封に相談した。慶封は、暫く待てと二人に言い残し、廬蒲蔽に告げた。廬蒲蔽曰く、「彼は君の讐（あだ）なり。天或は將に彼を棄てんとす。彼實に家乱る。子何ぞ病へん。崔の薄きは、慶の厚きなり」と。

襄公二八年（前545）慶封、呉に出奔 旧に倍して富む 昭公四年（538）弑さる

慶封は狩猟や酒好きで、政治は息子の慶舎に任せ、妻妾・家財を廬蒲蔽の邸に移して、女どもを交換しては酒宴を催していた。慶舎は、崔杼の乱後、亡命していた廬蒲癸を呼び戻し、これに自分の娘を妻として与えた。廬蒲癸は同じく亡命していた王何を呼び戻してもらい暫くは慶舎の身辺警護をしていた。やがて二人は慶氏を裏切って滅ぼす計画を練った。

（夫の計画を察知した慶舎の娘）廬蒲姜は、夫・廬蒲癸に、「大事な計画があるのに、私に話さないと成功しませんよ」というので、廬蒲癸は全て話した。姜曰く、「父（慶舎）はひねくれてます。引き止めないと、かえって出かけません。私が引き止めてみましょう」と。廬蒲癸は頼んだ。11月、大公の廟で嘗祭があり、慶舎が出席しようすると、廬蒲姜は暗殺計画を父（慶舎）に話した。そして出席を取りやめるよう引き止めたが、案の定、聴きいれず、慶舎は景公のいる大廟へ出掛けた。暗殺された。

慶封は、狩猟からの帰途それを知った。事件後彼らを攻めたが攻略できず、魯に出奔した。しかし、魯に斉からの手が回り、いられず呉に逃げた。慶封は呉に一族を集結させ住み着き、斉にいたときよりも裕福になった。

魯の子服恵伯が、叔孫に言うには、「天殆ど淫人を富ます。慶封又富めり」と。

叔孫穆子曰く、「善人の富む、之を賞と謂う。淫人の富む、之を殃（禍）と謂う。天其れ之に殃するなり。其れ將に聚めてこれを殲（滅）せんとす」と。

襄公二八年（前545）晏子分邑を受けず

崔杼の乱で群公子が逃亡した。慶氏が出奔すると景公は、彼らと呼ばせ戻し、財宝一式を取り揃えてもとの封邑を返還した。晏子には、邶殿の属邑六十を与えたが、受けず。子尾曰く、「富は、人の欲する所なり。なんぞ独り欲せざる」と。対へて曰く、

慶氏の邑は欲を足す。故に亡（逃）ぐ。吾が邑は欲を足さざるなり。之に益すに邶殿を以てせば、すなわち欲を足す。欲を足さば、亡げんこと日無からん。外にあらば、吾が一邑

も宰する（管理する）ことを得ざらん。邾殿を受けざるは、富を悪むに非ざるなり。富を失うことを恐るるなり。

且つ其れ富は、布帛の幅あるが如し。之が制度を為して（一定の幅が決まっているように、その両端を揃え）、遷ること無さしむるなり（はみ出させないようにする）。之を利に幅すと謂う。利過ぐれば則ち敗を為す。吾敢えて多きを貪らざるは、所謂幅（を大切にする）なり」と。

襄公二十九年（前544）呉の季札斉・鄭に使者として赴く

晏子を説び、之に謂いて曰く、「貴兄の封邑と政権を公室に直ぐ返しなさい。すなわち、内紛に巻き込まれないですみます。斉国の政権はやがて誰かの手に帰すでしょう。それが落ち着くまでは、暫く続くでしょう」と。晏子はそれに従った。故に欒氏・高氏の内紛に巻き込まれずに済んだ。

次いで、季札は鄭の子産に会った。旧知の間柄の如くであった。季札は、子産に、やがて内紛が起こり、政権は必ず貴兄に回って来る筈だ。その時は、礼をもとに慎重にやられべし、さもなくば、鄭国は崩壊する、とアドバイスした。

昭公二年（前540）韓宣子、斉から公女を迎えるために行く

韓宣子（韓起）は、趙武に代わって執政となった。晉公が斉の公女（少姜）を娶るため、斉に礼物を持って訪問した。その節、大夫の子雅と子尾が我が子を引き合わせると、「保家の主に非ざるなり。不臣なり」と批評した。多くの大夫は失笑したが、晏子曰く、「夫子（韓宣子）は君子なり。君子は信あり。其れ以て之を知るあらん」と。

昭公三年（前539）少姜死し、継室を納れんことを要請するため晉に晏子来朝。

昭公二年(前540)少姜輿入れの際、斉側では、上大夫の陳無宇が送り出す役をつとめたが、晉側では陳無宇が礼に適った、「卿に非ず」という理由で彼を拘留した。少姜は弁明したが聞き入れられなかった。少姜は、晉侯(平公)に寵愛された。が、その年の内に死んだ。

叔向、陳無宇を晉侯に言いて曰く、「彼、何の罪やある。君、公族をして之を逆(迎)えしめ、斉、上大夫をして之を送らしむるを、猶ほ不共(無礼)と曰うは、君の求むること以て貪る。国は則ち不共にしておの使いを執(捕ら)ふるは、君の刑はなはだ(偏)頗なり。何を以て盟主たらん。且つ少姜も辞あり」と。冬十月、陳無宇帰る。

昭公三年（539）鄭の游吉、晉の少姜の葬儀に参加。晉の大夫の梁丙曰く、甚だしいかな、子の此れがために来るや、と言うと、子大叔（游吉）曰く、

「はた已むを得んや。昔、文・襄の霸たるや、その努め、諸侯を煩わさず。諸侯をして三歳にして招聘し、五歳にして朝見し、事ありて会盟し、協（あ）はずして盟誓し、君、崩御すれば大夫弔問し、卿は葬式に共し、夫人は士が弔問・大夫葬儀に参加とした。そして以て礼を明らかにし、指示を発し、闕を補う相談するのに間に合って、これ以上の指示はなかったものだ。ところが今、寵姫の葬儀に際し、鄭が決まりを超えて卿を遣わしたのは、お咎めを受けては大変なので、負担を厭ってはいられぬからです。少姜死ねば、きっと斉から継室が入るでしょう。又私が祝賀に参ります。今回だけでは済みますまい」と。

昭公三年（前539）晏子が継室を納れんことを要請するために、晉に使節となって来た。婚約を済ませて、饗宴の席で、晏子は叔向に齊の現状について質問された。晏子曰く、「齊は今、季世（末世）です。よく分からないが、陳氏のものになるだろう。家量を以て貸して、公量以て之を収む、からです。

1．齊国の量（ますめ）＝四升で一豆、四豆で一区、四区で一釜、十釜で一鐘

2．陳氏の家量＝五升で一豆、五豆で一区、五区で一釜、十釜で一鐘

そして、民に貸す時は自家の大きな量で計って貸し、返す時は、公室の小さな量を使って返せばよい。山の材木や魚・塩・貝類も原価販売、民は労力の三分の二を公室に納め、三分の一を自分の衣食にあてている。一方、公室の倉庫は余剰物が腐敗して虫が湧いているのに、長老たちは飢え凍え、国都では、「履（く＝普通の靴）は賤（安）くして踊（足きりの受刑者の履く義足）は貴（高）し」という有様だ。陳氏の民を愛すること父母の如く、之に帰すること流水の如し。民を獲ること無からんと欲するも、はたいずくんぞ之を避けん」と。叔向曰く、「吾が公室と雖も、今亦季世なり。軍律乱れ、庶民疲弊して、宮室滋々（益々）侈（おごり）、道殣相望みて（道端に死人が転がっているのに）女富（寵姫たち）は滋々はなはだし。政は韓・趙両氏私家に握られ、民拠る所なし。いずれ公室は衰微するだろう」と。

昭公三年（前539）齊公（景公）晏子の宅の改築を勧め、晏子断る

かつて景公が、晏子の邸宅を、市場に近く、土地が低くて狭く、騒がしくてごみごみしているという理由で、他の場所に用意してやろうと言った。晏子が「現在の邸宅は、父が住み、自分にとっては過分なところだ。しかも市場に近く、便利だからここがよい」と答えた。景公がからかって、「市場に近いなら、貴公は何が高いか安いかわよく存じているだろう」というので、晏子は、「踊は貴く、履は賤し」と答えた。叔向に言った言葉はこのときの言葉である。猶、景公はこれによって刑罰を減らした。

晏子が晉への遣いから帰ると、景公は住宅を改築し、すでに完成していた。晏子は齊公に拝謝し、早速これを取り壊し元通りにし、以前の住人を呼び戻した。公は許さなかったが、陳桓子（陳無宇）を通じて請うて許可された。

昭公四年（前538）公室の姜一族は衰弱し、陳氏の嫡一族が隆盛になってきた。

昭公五年（前537）鄭の子皮が齊の子尾家から妻を迎えた。晏子がたびたびこれに会いに行くので、陳無宇が訳を尋ねると晏子是对えた。「（子皮は、子産のような）能く善人を用いる。民の主なり」と。

2.1 . 昭公十年（前532）欒氏・高氏の乱。

齊の恵公から派出した欒氏と高氏は皆酒好きで、婦人の言を信じ、人に怨まれていた。そして、陳氏・鮑氏より強いのにこれを憎んで、欒・高氏を攻めた。晏子には四家から誘いあったが、中立を守った。欒・高は敗れ魯に奔走した。陳・鮑二氏が欒・高の財産を分け取りすると、晏子は陳桓子（陳無宇）に言った。

「必ずこれを景公に致せ（差し出せ）。譲は徳の主なり。譲を之れ懿徳（美德）と謂う。凡そ血気あるものは、皆争心あり。故に利は強うべからず。義を思うを愈（勝）るとなす。義は利の本なり。利を蓄うれば孽（禍）を生ず。しばらく蓄うこと無からしめんか。以て慈長すべし。（ゆっくり増やせばよい）」と。陳桓子、ことごとくこれを景公に差出し、自分は莒への隠居を請うた。陳桓子はこの乱で亡命した諸公子たちを呼び戻し禄を返した。景公が莒の近くの邑を与えたが辞退した。景公の母・穆孟姫が桓子のために高唐を請い、陳氏はこれから大きくなった。

2.2 . 昭公20年（前522）景公、疥癬を病み、ついで疢（おこり）い癒せず

景公、疥癬を病み、ついで疢（おこり）い癒せず、諸侯からの見舞い絶えず。晏子曰く、治療の効果が無いのは、かくかくの悪政なため。徳を修めるべし、と諫言したので、景公は納得し、政令を緩め、閑所の廃止、禁令を解き、賦税を軽減、負債免除した。

2.3 . 昭公二十年（前522）景公虞人を招くに弓を以てす

十二月、齊公、沛に田（狩）す。虞人（狩場の役人）を招くに弓を以てす。進まず（来なかった）。公、之を執（捕ら）えしむ。辞して曰く、昔、我が先君の田するや、旃（旗）以て大夫を招き、弓以て士を招き、皮冠以て虞人を招く。臣、皮冠を見ず。故に敢えて進まず、と。すなわち之を許す。

2.4 . 昭公二十年（前522）【和同の弁】

齊公（景公）、田（狩）より至る。晏子、遯台（せんたい）に待す。子猶（ 𢵿 ）馳せて造（至）る。公曰く、「唯だ 𢵿 と我と和するかな」と。晏子对えて曰く、「 𢵿 も亦同するなり。いず

くんぞ和と為すを得ん」と。公曰く、「和と同と異なるか」と。対えて曰く、

「異なり。和は羹（吸い物）の如し。水火、醢（けい=酢）、醢（かい=塩から）、塩、梅以て魚肉を烹、之を燂（炊）くに薪を以てし、宰夫（調理官）之を和し、之を齎（ととの）えるに味わいを以てし、其の及ばざるを濟（増）して、其の過ぎたるを洩（へら）す。君子之を食らいて、以て其の心を平にす。君臣も亦然り。君の可と謂う所して否あらば、臣は其の否を献（進言）じて、以て其の可を成し、君の否と謂う所にして可あらば、臣は其の可を献じて、以て其の否を去る。是を以て、政平かにして干（犯）さず。民、争心無し。（詩を中略）先王の五味を濟し、五声を和するや、以て其の心を平かにして、其の政を為すなり。声も亦味わいの如し。一氣・二体・三類・四物・五声・六律・七音・八風・九歌、以て相成すなり。清濁・小大・短長・疾徐（緩急）・哀樂・剛柔・遲速・高下・出入・周疏、以て相濟すなり。君子之を聴きて、以て其の心を平かにす。心平かにして徳和す。

今、抛は然らず。君の可と謂う所は、抛も亦可と曰い、君の否と謂う所は、抛も亦否と謂う。水を以て水を濟（増）すがごとし。誰か能く之を食らわん。琴瑟の専一なるが如し。誰か能く之を聴かん。同の不可なるやかくの如し。

25・昭公二十年(前522)景公の【死の嘆き】

（景公と晏子が）酒を飲みて楽しむ。公曰く、「古よりして死無くんば、其の楽しみ如何」と。晏子対えて曰く、「古より死無くんば、則ち古の楽しみなり。君なんぞ得ん。昔、爽鳩氏始めて此の地に居り、季前（きそく）之に因り、有逢伯陵、之に因り、蒲姑氏、之に因り、而る後に大公之に因る。古者、死無くんば、爽鳩氏の楽しみにして、君の願う所に非ざるなり」と。

以上